

中学校音楽科における横断的な学習活動の開発と実践

ー「英語の歌」を用いた外国語科との横断型学習の視点からー

教育学研究科 教育実践創成専攻 教科領域実践開発コース 中等教科教育分野 保坂杏樹

1. はじめに

筆者はかつて大学時代の中学校英語における教育実習で、「Warm-up」活動として「song」という英語の歌をリスニングする活動を行った。英語の歌詞の意味を学んだり特徴的な韻を理解したりするという目的である。しかしその際、生徒の中には音楽の曲想について感じ取っている生徒や、身体全体でリズムに乗って音楽を楽しんでいる生徒の様子も観察することができた。また、ハーモニーを聞き取ったりしている生徒がいたり楽器の音色などに注目して聴いている生徒もいたりしたことから、「音」や「音楽」そのものを楽しんでいるという生徒の学習意欲を実感した。そこで、逆に音楽の授業においても音楽活動を中心にした他教科との横断的な学習を充実できないだろうか、と考えた。

2. 背景

新学習指導要領(文部科学省, 2021)では、①社会に開かれた教育課程②育成を目指す資質・能力③カリキュラム・マネジメント④「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善の4つが改訂のポイントとして掲げており、今日の学校教育において、これらの重要性は非常に高まっている。また、中学校学習指導要領(平成29年告示)解説音楽編第1章第1款では、基本方針として「各学校におけるカリキュラム・マネジメントの推進」を掲げており、その中でも教科等横断的な学習を充実させることが求められている。各教科の枠を超え教科横断的な視点で学ぶことで、子どもたちが自ら関心を持ったり主体的に考えたりする契機となり(学びの統合)、物事を多面

的・多角的に考える力を育成し(幅広い視野)、主体的に課題を見つけ、解決することに繋がり(課題発見・解決)、さらに様々な課題に柔軟に対応していく中で「生きる力」を育成していくことが期待できる(中央教育審議会答申, 2016)。

このように、教科等を多面的・多角的に考えることは教科単体の学びを越え、子どもたちの色々な気づきや発見の場を作ることに繋がるのではないだろうか。この「教科等横断的な学習」を音楽科の中で充実させるために、音楽の学習を中心とした学習活動の内容やそのための効果的な指導を探る。なお、今回の実践において音楽科と関連させる教科については、教育実習の経験を踏まえて「外国語科英語」とする。

3. 問題

社会の要請としてこのような「横断的な学習」の実現が謳われている中で、教育現場の実態はどのようなのだろうか。音楽科における「教科等横断的な学習」についての授業実践に関する事例は複数報告がされている。教科の関連例としては、音楽×体育(リズム遊び、リズム運動、ダンスなどでリズム感覚と運動感覚を養う)や音楽×社会(伝統音楽、伝統楽器や民族音楽などの歴史を学ぶ)、音楽×国語(韻文と音楽の関連、詩の解釈や詩と旋律の抑揚の関係、旋律にふさわしい歌詞の創作)などである。

また、今回行う音楽×英語の関連について、各教科の教科書(中学生の音楽/教育芸術社、NEW HORIZON/東京書籍)では、学年によって差はあるもののそれぞれ「英語の歌」が2～3曲程教材として含まれている。しかし、あ

くまで音楽科での学習として「曲想と歌詞の内容についての関わり(表現)」が中心であり、外国語科 英語における「英語の音声やリズム、日本語(訳詞)との違いに気付いたり理解したりする」というような要素は意識されていない。また、「音楽科の教科横断性は従来の研究で十分に考察されているとはいえず、むしろ音楽科は他教科との合科的、総合的、教科横断的な授業実践が困難な教科だとみられてきた(小池, 2023)」というような懸念もある。さらに、山梨県内の公立中学校教員にお話を伺ったところ、「横断的に学習することが大切なのは理解しているが、実際はなかなか難しくどのように指導したら良いのか」と学校現場でのリアルな実態を漏らしていた。

以上のように、「音楽科においてこれまで他教科との実践は行われてはいるものの、それが「充実している」とは決して言い難い」ということがいえるだろう。

4. 目的

このような社会の要請や音楽科の実態、現場の声等を踏まえると、プラスαの学習として扱われがちな音楽の横断的学習ではなく、子どもたちの教科に対する興味関心が広がるような横断的な学習を行うことが理想である。今回は音楽科と外国語科 英語と横断させた実践を行い、それを踏まえて音楽科での横断的な学習が子どもたちにどのような学習効果をもたらすかを探り、効果的な指導方法を明らかにしていく。

また、今回の実践におけるキーワード(柱)を、①教科(音楽・英語)に対する興味関心や捉え方(子どもたちへの学習効果)②横断的な学習の効果的な指導法の2点と設定した。「音楽や英語をより楽しい、面白い、こんな繋がりがあるんだと感じさせることが期待できるのではないか」「音楽が苦手な生徒にも、英語と横断的に学ぶことで音楽に対する見方や苦手意識がプラスに変化するのではないか」「逆に、英語が苦手な生徒にも音楽を通して英語に触れさせることで新しい発見や面白さを感じ

じさせる可能性があるのではないか」というような仮説をもとに、音楽科における横断的な学習の重要性や可能性を検証・明確化することを目的とする。

5. 方法

山梨県内の公立中学校第1学年のうち、授業を行う1クラスの生徒にGoogle Formを用いた事前調査を依頼する。なお、調査日は研究授業を行う以前の日程(令和5年10月31日)とする。ここでは、生徒の音楽や英語に対する興味関心の程度や学習意識を尋ねるものとし、授業後にも事後調査として同様に調査を行う(令和5年11月)。これをもとに、横断的な学習がもたらした生徒への学習効果等を明らかにする。

6. 本研究における「横断的な学習」の位置づけ

では、具体的にどのような学習が「横断的」といえるのだろうか。ここで、本研究で扱う「横断的な学習活動」の具体的な方法について考えたい。今回は高階(2018)を参考に、何をどのように横断させるかを考えていく。高階(2018)は、横断的・総合的な学習活動の編成として「教科等横断のカリキュラムを編成する際の三つの関連性タイプ」を掲げている。

上の表では主にカリキュラム編成の際の関連性を述べているが、本研究における横断的な学習活動の提案についても高階(2018)の「関連性タイプ」を参考にした(図1)。

関連パターン	意味・特徴	具体例
①目標関連	・教科等横断でカリキュラムを編成するが、カリキュラム編成の目標が一つに統合される ・大きなテーマ(課題)に向けて取り組む活動が可能 ・総合的学習に近い	生徒会、文化祭、学級活動、社会科、道徳等を組み合わせで実施した「全校タリオン作戦と地域清掃活動」など
②内容関連	・教科等横断的な考え方の中で、比較的最もわかりやすい	・「総則編」の「資料」に示されている「現代的な課題に関する教科等横断的な学習内容」
③方法(能力)関連	・「能力(言語能力、情報活用能力、問題発見・解決能力)」はどの教科等でも育成すべきものであるため、特に教科等を横断しなくても可能である ⇒国語科で言語能力を育成するように、社会科や理科でも授業を通して言語能力を指導する⇒同様に、情報活用能力や問題発見・解決能力も強化独自で育成することができる	左の内容を踏まえ、例えば、発表力を育成する場合、社会科や理科ではほぼ同じような指導を行うことが予想される(育成する能力の特徴や育成方法＝学習活動の内容により、指導方法が似通ったものになるため)

図1:「教科等横断のカリキュラムを編成する際の三つの関連性タイプ」(高階, 2018)をもとに作成したもの

そして、今回の実践においては、③のように音楽科の中で子どもたちにどのような力を育成したいのか、何を身につけたいのかをゴールにして学習活動を提案することとする。これを実現するためには、学習指導要領を踏まえ、それぞれの教科で育成したい資質・能力を踏まえた上で考えていくことが重要である。また、今回の実践における横断的な学習は「発展的な学習」とするのではなく、「日々の音楽の授業を多角的に学ぶ授業」とし、あくまで音楽科の範囲内で行うこととする(英語の学習と単元をコンテンツ的に横断させることは行わない)。

7-1. 実践概要(指導案の検討)

(1)領域の設定

横断的な学習活動の指導を検討していく上で、学習指導要領との関連を明確にしていく。学習指導要領(平成29年告示)解説 音楽編第3章「各学年の目標及び内容」では、第1学年の内容(1)A 表現のイ(知識に関する事項)とウ(技能に関する事項)において、どちらも「言葉の特性」や「言葉の発音」等が言及されている。「言葉の特性」では、言葉の抑揚、アクセント、リズム、子音や母音の扱い、言語のもつ音質、語感などが挙げられるとしており、「発音」では、生徒が、歌詞の詩情を味わいながら子音や母音の発音を工夫するなどして技能を身に付けていく学習が考えられるとしている。今回の実践ではこの部分に着目し、「表現」のうち「歌唱に関する内容」において、これらの「言葉」や「発音」等を深める学習活動を行うことと設定した。また、外国語の歌詞による歌唱教材の例は示されておらず、教師自身で歌唱教材を選択できることから、教師のオリジナル性やクリエイティブ性が求められる。

(2)題材の設定

外国語の歌詞による歌唱教材について、学習指導要領での位置付けを踏まえた上で設定していく。今回の実践では、音楽×英語の指導事例として、高橋(2021)の先行研究をもとに、使用する題材を設定について考えた。高橋(2021)によると、「英語の歌」の指導のねらいとして「英語の歌を歌うことが楽しい」という気持ちを学習者にもたせることが重要だとしている。また、それを教科等横断的に扱うという視点では、「日本の歌」と「英語の歌」のそれぞれの言語文化によって、「歌唱法」や「言語の特性」、「発音やリズム」が異なることを学習者に正しく理解させることとしており、これらの二つの視点から指導を行うことが重要であるとしている。それにより、生徒に「英語の歌詞の意味がわかった!」という達成感を感じさせたり、英語で歌うことで生徒が発音やリズムに気を付けながら「英語らしく歌えた」と感じたりすることができるようしていくことが求められる。本研究では、これを参考に学習目標や学習活動を組み立てていく。

さらに、この高橋(2021)をもとに、授業実践で実際に扱う題材の設定を行った。英語と音楽双方の意図を組み込むためにどのような楽曲を扱うかを考え、筆者が設定したものが以下の表である(図2)。

使用する題材を自由に選んで、 【「英語の歌」を用いた音楽と英語を横断するための題材設定の条件】 i. 歌詞の内容について、生徒の実態に応じた分かりやすいもの、親しみやすいものであること ii. 音楽科における歌唱指導に加え、英語の文法や単語の意味を理解したり、発音を理解したりすることのできるものであること iii. 日本語と英語のそれぞれの歌詞の内容を比較できるものであること※日本語 ver. 英語 ver. の両方がなくとも、英語の歌詞の意味を理解できるものであること iv. 日本語と英語のそれぞれがもつ言語の特徴(子音や母音、語感、リズムなど)を感じ取れる要素を含んでいるものであること v. 生徒が、生活や社会における音や音楽、音楽文化についての関わりへの気づきや関心を促すことに繋がるもの
--

図2:「英語の歌」を用いた音楽と英語を横断するための題材設定の条件

例えば、条件 i では「生徒の実態に応じた分かりやすいもの、親しみやすいもの」としている。横断的な学習を行う上で特に配慮したい事項として、横断する教科への苦手意識が

ある生徒へのアプローチが考えられる。実際に生徒に行った事前アンケートにおいて、「音楽は好きか」という質問では、「とても好き」と答えた生徒が85.2%、「やや好き」と答えた生徒が14.8%であり、「あまり好きではない」、「全く好きではない」と答えた生徒は0であった。一方、英語に対しても同様に質問したところ、「とても好き」…37%、「やや好き」…33.3%、「あまり好きではない」…18.5%、「全く好きではない」…11.1%であり、音楽と比較すると英語は生徒の苦手意識が強いことが分かった。このように、教科への苦手意識をさらに強めてしまうことがないように、逆に苦手意識を他方の教科が補うことができるような教師の働きかけや授業づくりが重要となる。以上を踏まえても、生徒の実態を綿密に把握した上で、歌詞の内容が分かりやすく親しみやすいものが適切だとした。

この条件を踏まえた上で、今回の実践で扱う題材を以下のように設定した。これらはどちらも「サウンド・オブ・ミュージック」というミュージカル作品の音楽である。それぞれの楽曲の特徴を以下の図にまとめた(図3)。

1 Do Re Mi	O.ハーマースタイン II 世作詞/ロジャース作曲
・歌詞が分かりやすい(文法ではなく、単語中心) ・発音(音素)をチャンツのように楽しめる ・ドーナツの音までそれぞれ意味が日本語と異なり、比較できる ・明るい曲調で親しみやすい	
2 Edelweiss	O.ハーマースタイン II 世作詞/ロジャース作曲
・教科書記載 ・日本語の歌詞との意味の違いが比較できる ・長い音価の音符を母音で伸ばすリリックがある(英語での歌い方、発音を学習できる) ・R, Lの発音の違いを学習できる ・歌謡指導として、フレーズのまとまりなどにも触れることができる	

図3：授業実践で使用する楽曲の特徴

上の図からも分かるように、この2曲は先に提示した題材設定の条件を満たしている。また、この2曲を扱うことはミュージカルにおける音楽の効果や役割等についても触れることができる。音楽の授業において大切な、生活や社会の中の音楽や音楽文化を考えるきっかけにもなり得るだろう。さらにこの2曲は対照的な曲想であるため、音楽の要素を踏まえた上で表現方法の違いを考えるのに比較しやすい。曲想の違いを比較することで、歌唱

表現についての工夫を生徒が自分たちで気づき、考えることに繋がると考えた。そして、これらの楽曲はともに日本語と英語の歌詞の内容、発音が異なるため、言葉の発音や母音の歌い方について学びやすい。これらを授業の中で触れることで、日本語バージョンとの違いに気づかせ、音楽科の学習としていく。

7-2. 実践概要(指導の工夫)

(1)授業実践の概要

授業数は2時間いただくことができたため、全2時間の扱いとした。以下に、実際に行った『英語の歌』を用いた横断的な学習活動』についての概要を示す。

①期間 令和5年11月

②対象 山梨県内公立中学校1学年1クラス

③題材名 「英語の歌の表現を味わい、日本語との言語の違いや歌い方を楽しもう」

④使用教材

- ・“Do-Re-Mi” O.ハーマースタイン II 世作詞/R.ロジャース作曲
- ・“Edelweiss” [英語で歌おう!] O.ハーマースタイン II 世作詞/R.ロジャース作曲(令和5年度版 中学生の音楽① 教育芸術社 P38)

この授業を通して生徒に最も感じてほしいことは、日本語だけではなく英語で歌うことの、言葉的な楽しさや面白さ、難しさである。それだけではなく、表現方法の違いや日本語と英語の歌詞の特徴を理解させ、諸外国について興味を持ったり、「英語の歌」に対する興味関心を広げ音楽への見方をより幅広いものにしたりすることもねらいとしている。したがって、指導においては柔軟な発想で幅広く教材を扱うことが重要である。具体的には、英語の歌詞の意味や発音を正しく理解させ日本語と英語の両方で歌唱したり、扱う二つの楽曲の音楽の要素や曲想を捉えその違いの特徴から歌い方(表現方法)を生徒自身が気づき、考えたりするという学習活動を取り入れる等である。本テーマにおいては、生徒にとっては難易度が高いと感じるという可能性もある

ため、「音楽嫌い・英語嫌い」な生徒を生んでしまったり、生徒にネガティブなイメージを持たせてしまったりするということのないよう段階的に指導を行い、生徒の理解度や実態に応じて適宜工夫していく。

(2)第1次

時間	学習活動	指導上の留意点
導入 (15分)	1 「英語の歌」に関心を持つ ① OPP シートの記入(紙) ② サウンドオブミュージックの一部を鑑賞する 【めあて】「ドレミの歌」の歌詞の意味や歌い方を考え、英語で歌うことを楽しもう。	・ ICT を活用し、スライドで学習を進める (学習形態：一斉)
展開 (25分)	2 「ドレミの歌」に親しむ (1) 英語版を聴き、歌詞の意味を理解する (2) 英語と日本語での歌詞の違いや言葉(意味)の違いを考える (3) 両方の言語で歌唱する	・ 発音、意味の確認を行う ・ グループ全体で共有する(学習形態：班) ・ パートや役割を分担してランダムに歌唱する
まとめ (5分)	3 まとめを行う ① OPP シートの本時欄に記入する	・ 次回の予告を説明する

第1次の授業導入では、「英語の歌」の歌唱方法について現段階での個人の考えをまとめてもらった。この2時間の学習を通して、歌う時の母音や子音の発音や歌詞の意味、英語の歌詞のフレーズの取り方などの歌唱方法を考えさせていくことを目的としているため、その導入とした。

また、展開部分の「ドレミの歌に親しむ」では、グループ活動として英語の歌の歌詞の意味を理解する活動を行った。下の図は、グループ活動の際に使用したワークシートである(図4)。「ヒント」を提示したり穴埋めの箇所や表記を意図的に工夫したりし、英語の授業で習ったことがなくても必ず答えにたどり着けるようにした。このため、「英語の勉強」が中心の学習となるのを避け、歌唱法の学習を中心に行えるようにしている。

ワークシートの裏面(図5)には音源のQRコードを添付した。音源を直接動画サイト等から検索させると、生徒が字幕をオンにしたり他の動画を見てしまったり等の懸念がある。事前に字幕や広告などをカットし編集したものをクラウド上で共有できるようにし、生徒が直接スムーズに楽曲にアクセスできるようにした。

穴埋め終了後は全体で答え合わせや意味の確認を行い、発音や歌唱指導を含めて歌唱練習をした(図6)。

図4：第1次で使用したワークシート(表面)



図5：第1次で使用したワークシート(裏面のQRコード)

日本語の歌詞と英語の歌詞を比べてみよう！		
音階	もとの曲(英語)	日本語版
ド	鹿(deer)	ドーナツ
レ	太陽の光(ray)	レモン
ミ	私(Me)	みんな
ファ	遠く(far)	ファ
ソ	縫いもの(Sew)	あおいそら
ラ	ソの次の音	ラッパ
シ	紅茶(Tea)	しあわせ

図6：第1次で使用したスライド

(3)第2次

時間	学習活動	指導上の留意点
導入(10分)	1 (一次に引き続き、「英語の歌」に関心を持つ) (1) 「ドレミの歌」(前時の復習をする) (発音や表現方法等) 【めあて】Edelweiss の歌詞の意味や歌い方を考えて歌おう	学習形態：一斉 めあてを提示する(板書)
展開(25分)	2 「エーデルワイス」に親しむ (1) 「エーデルワイス」(テノール独唱)を鑑賞する (2) 英語の歌詞を確認し、英語と日本語での歌詞の違いや言葉(意味)の違いを考える (3) 英語と日本語でどのように表現したら良いか、表現方法を考え、他者と共有する (4) 「ドレミの歌」との表現方法の違い(旋律のまとまり、曲のフレーズへの意識)について、どのように工夫できるかを考える (5) 両方の言語で歌唱する	学習形態：一斉 ・ スライド使用 ・ 英語訳や発音、歌い方を指導する
まとめ(10分)	3 まとめを行う ① 音楽の多様性(英語の歌、文化の違い、ミュージカルの歴史等)についてをまとめ、理解を深める ② OPPシートの本時欄に記入する ③ 事後アンケート(Google form)の回答を収集	学習形態：班 ・ ICT を活用したグループワーク

第2次も第1次と同様に、映像を見たり聴いたり、ワークシート(図7)を使用し歌詞の意味を確認する等の活動を行った。歌詞の確認の際は、日本語と英語の歌詞を比較したり英語での歌い方を練習したりしながら「歌詞の違い」に特に注目させて学習活動を進めていった。

また、第2次では「ドレミの歌」と「Edelweiss」の曲想の違いを比較するという活動を取り入れ、ICTを活用しグループで行う学習とした。曲想の異なる2曲を比較することで、「英語の歌」でもリズムやテンポの違いによって拍の取り方や表現の仕方も変わってくるということを子どもたちに考えさせることをねらいとしている。今回はGoogle社のJamboardという共同編集ツールを用い、曲想の比較をもとに歌唱表現を考えていった。生徒の例を見てみると、歌詞の意味を理解させ意味を調べたり実際に発音練習を行ったりしたことで、歌詞の詩情や曲想に着目して歌唱表現を考えることができていた(図8)。普段の歌唱活動でも行うような、歌詞の詩情を味わうなどの活動や発音を意識した歌い方を、「英語の歌」の学習でも同様に行うことで「言葉」に着目した密度の高い「英語の歌」の学習活動を展開することができた。

一方で、英語の歌詞と日本語の歌詞では言葉の特性によりフレーズの取り方も変わってくることから、この授業の中でその点にも注目できたらさらに音楽的に発展できたのではないかと考える。しかし 2 時間という短い時間の中で子どもたちにそこまで考えさせるのは難しいという面もあった。

このように、歌詞の違いに触れる学習を行うことで、日本語と英語の言葉の特性に注目させることをねらいとしている。日本語と英語は 1 音に対する言葉のはめ方が大きく異なるので、その点やリズムの違い等を考えることは「英語の歌」のより音楽的な歌唱表現を学ぶことに繋がると考えた。また、学習指導要領との関連も踏まえて歌詞の詩情を味わったり英語での歌い方の技能を身に付けたりす

るということに繋げた。



図7：第2次で使用したワークシート(表・裏面)

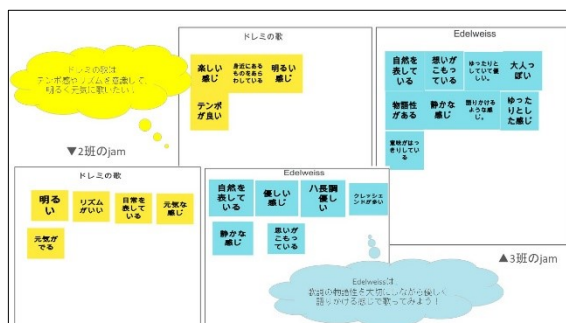


図 8 : 生徒の jamboard の例

8. 結果と考察

ここでは、事前・事後アンケートの調査結果をまとめる。

まず、「英語の歌は好きですか」という質問(図9)において「とても好き」と「やや好き」を含めた肯定的な回答の割合は、事前の81.4%から96.1%に増加した。また、生徒のコメントの中で、事前の方では「何を言っているのかわからない」という意見も多かったところ、事後の方では歌詞の意味を知って英語で歌うことができたことに対する嬉しさなどについて回答している生徒も多く、この授業を通して「英語の歌」に対する意識が良い方向に働いたといえる。英語で歌うことは普段の授業内でそれほど多くはないかもしれないが、今回の実践でそのような機会を生徒に提供することで、生徒のコメントからわかるように「音楽も英語も学べた」という達成感

を感じている生徒が多くいた。

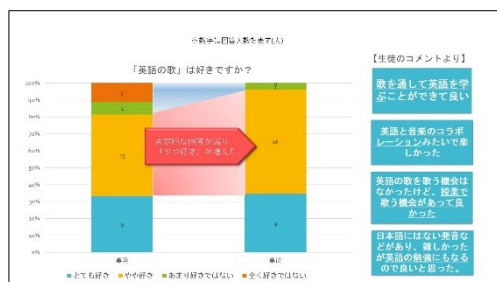


図9：アンケート結果①

次に、「英語の歌を歌えるようになりたいと思いますか」という質問(図10)では、肯定的な回答は合計 81.5%から 84.6%に増加した。その中でも、事前の「少し思う」から事後「とても思う」に変化した生徒も増えた。生徒のコメントを見ても、普段はなかなか歌う機会の少ない英語の歌も、音楽の授業を通して発音や意味を意識して歌ったり聴いたりすることで、音楽や英語に対する新しい見方や発見ができていているといえる(尚、「全く思わない」という回答が+1になっているが、生徒に尋ねたところ「もう既に歌えるからこう回答した」と答えていた)。

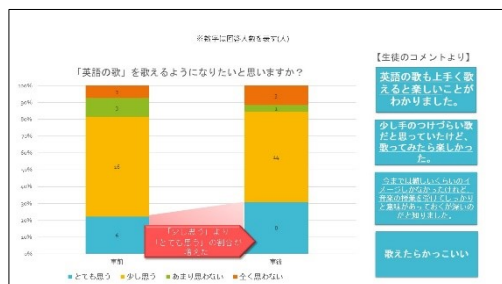


図10：アンケート結果②

また、下の図11の表のように、これら3つの質問から、それぞれの教科単体に対する意見も非常にプラスに変化していることがわかる。「英語の歌」に興味が高まり授業後に自分で他の曲も聴いてみた、という生徒もいた。また図12のように、これらの質問からも生徒の興味関心は高まっているといえる。生徒のコメントからもわかるように、発音や歌詞の意味に注目して歌うことで、「英語で歌う」とい

う生徒の達成感を感じたり、「子音や母音の歌い方」などから“歌唱の技能的な充実度”も高まったりしたということがわかる。結果として、今回の音楽×英語の横断的な学習を通して生徒の興味・関心の部分に関しては全体的に高まったといえる。

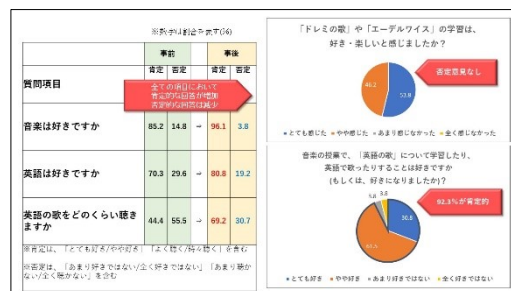


図11：アンケート結果③

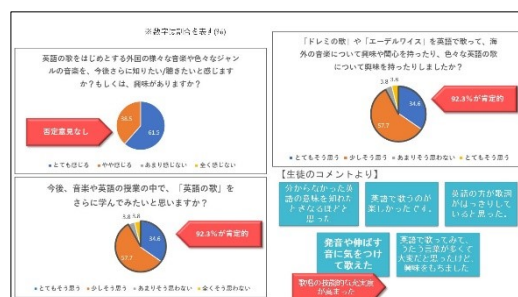


図12：アンケート結果④

さらに、図13のような質問では96.2%の生徒が肯定的に回答していた。これは、横断的な学習の重要性を問う質問であるが、生徒に分かりやすいような言い回しにしている。生徒のコメントからは、「両方のためになる」、「音楽の〇〇も英語の〇〇も学べる」等のように、音楽で学ぶ要素だけでなく別の視点からも学ぶことができるということを実感している生徒が多い。このような生徒の意見や結果からも見えてくるように、今回活動例として扱った「英語の歌」のように、色々なアイデアを柔軟に、横断的・総合的に活用していくことでそれぞれの教科にとって非常に良い効果が表れると考える。また、そのような活動機会を与えるということも教師にとって非常に重要だと考えた。

【質問】音楽の授業や英語の授業の中で、「英語の歌」を学ぶ活動は必要/大切だと思いますか？	
特に興味(とてもそう思う・少しそう思う)	計96.2%
別に興味(あまりそう思わない・全くそう思わない)	計3.8%
▼生徒のコメント	
英語が音楽的なものになるから。	
音楽のリズムや歌詞も覚えるから。	
英語の発音練習にもなるから。	
英語の歌詞を覚えない人も、他の曲ではこんな歌があるんだと興味を持てるから。	
英語に楽しく感じると言うから。	
他の国の曲を知ること、自分の国の曲と比較できるから。	
これからの社会で大切だと思うから。	
外国に慣れることは大事だから。	
色々なジャンルを知りたいからです。	
日本の曲だけでなく英語の曲の良さを知ることが出来るからです。	
英語の歌を通して色々な国の文化が広がると思うから。	
英語の発音も覚えるし、歌も覚えるようになるから。	

図 13 : アンケート結果⑤

今回の研究目的の柱の一つ目である「生徒の興味関心を広げる」という視点に関しては、アンケートで得た結果のように、「各教科が相互的にもたらすそれぞれの教科に対する苦手意識のカバー」や、「教科だけではない、日常生活における様々な視点の広がり」等の学習効果があった。また、二つ目の柱である「(横断的な学習を有効的かつ充実させるための)効果的な指導法」に関しては、①題材の設定を柔軟に考えることや、②教師自身が主体的・創造的に横断的な学習活動を設計していくこと、③それぞれの教科に対する苦手意識を考慮し、他者と協働的に行う活動等の工夫を取り入れること、④苦手意識を持つ生徒でも達成感を感じられるようなハードルの設定等々が挙げられる。「横断的な学習」は難しいと思われるが、何か少しでも、小さいことでも良いので授業の中で子どもも教師も多面的・多角的な視点を持ち柔軟に授業を創っていくことでその実現に大きく繋がるだろう。また、横断的な学習活動の設計では、生徒の教科ごとの習熟度や学習進度、実態等を明確にした上で単元計画を考えることが非常に重要である。

9. 今後の課題

今回の授業実践では、ポジティブな結果を得ることができた反面、2回というわずかな授業時間の中ではできなかったことも多くあった。生徒の中には、「発音や二重母音などの歌い方が難しかった」という意見もあった。また、「英語の歌」の学習によって「音楽的に歌

う効果がさらに高まった」や「フレーズの取り方に気付けた」等という“音楽的”効果の部分をもさらに検証していきたいと考える。そのため、今後はこのような活動を英語の Warm-up 活動のように常時的に扱うことも視野に入りたい。音楽の興味を広げたり、世界共通の文化・言語としての音楽を実感し楽しんだりすることのできるような授業を引き続き追及していきたいと考えている。

10. 引用・参考文献

- 文部科学省 「中学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説 音楽編」 平成 29 年
中央教育審議会答申 2016
教育芸術社 「中学生の音楽①」（令和 5 年度版）
東京書籍 「NEW HORIZON①」（令和 4 年度版）
小池順子(2023) 「音楽科の教材解釈と教科横断的」な学習の可能性ー歌唱共通教材「虫のこえ」を例に考えるー 千葉経済大学短期大学部 研究紀要 第 19 号 11～20 p.12
高階玲治(2018) 教育新聞「新しい潮流にチャレンジ 教科等横断の学習をどう進めるか」教育創造研究センター所長
高橋美由紀(2021) 「外国語教育・音楽教育における「英語の歌」の指導ー教育間の連携と『音韻構造』に焦点を当ててー」 教科開発学論集 第 9 号 pp.41, 42
(実践についての学習指導案、使用したスライド等)

https://drive.google.com/drive/folders/1wquLNZlcl1pryYSs4L2hUO_dVvX22DRBn?usp=drive_link

謝辞

本研究の遂行にあたり、指導教官として終始多大なご指導を賜った、山梨大学大学院総合研究部教育学域教育実践創成講座 片野耕喜教授に深謝いたします。

ご多忙の中快く調査にご協力くださり、様々なご指導・ご助言をくださった実習校の先生方に心よりお礼申し上げます。